

「クリシュナムルティの教えにおける人間・自然・リアリティ」

「これはクリシュナムルティの家庭教師を任じ、星の教団の活動にも重要な役割を果たし、ドペシュ  
ワルカール教授の恩師でもあったE・A・ウッドハウスが書いたもので、クリシュナムルティの教えの  
画期的な意義を指摘した貴重な論考である。この顯現の世界における自然と人間の関係と意義、創造、  
等々についての深い洞察が示されているので、全文を紹介する（訳 大野純一） 編集者】



## クリシュナムルティの教えにおける人間、自然、リアリティ

あらゆる問題に、散漫な推論のプロセスによってではなく、ある中心的な真理に直接訴えることによって対処するという、クリシュナムルティによって採用された特異な直観的教え方は、それを見守つたことのある人々にとってはきわめて印象的なものである。多分、なによりもこのゆえに、多くの人々は彼のことを本能的に 教師 と括弧付きで書くことによって区別すべく促されてきたのである。人々は、それが非凡な教えだと感じたのだ。それには偉大さの刻印が押されている。それは、人類の 師<sup>マスター</sup> / 教師<sup>ティーチャー</sup> の系譜に属しているのだ。

が、他の人々にとつては、それを伝えることがまったく不可能な何かであるという、不可避的な不都合をそれは持つていて。で、これは、 時々起ることなのだが、 クリシュナムルティの教えを学んでいる人が、友だちに彼のメッセージの概要について尋ねられ、その根本的真理を選び抜いて示すよう乞われた時、現実の困難として感じられる。このように挑まれた人は、ただちに次のことを発見するからである。すなわち、他の人にクリシュナムルティの教えを提示するためには、クリシュナムルティ自身の中では實に見事に、かつ容易に働いているものとはまったく異なるテクニックが必要だということである。

クリシュナムルティが話している時、まさに彼が常にありありと彼自身の生きた真理を眼前にしているという事実が、ある摩訶不思議な仕方で彼の聞き手に伝わり、多くのものごとを容易に

思わせるのだが、実は少しも容易ではないのだ。これこそはまさに、自称解説者がただちに見出すことなのである。人が実際に彼に傾聴していた時には実に明白に思われた連関が、今や論理的思考の相關関係へと翻訳されなければならない。彼が指摘した時にはほとんど言うまでもないようと思われたことが、今や、論証で補強されなければやけてしまうのである。クリシュナムルティ自身にとっては、生きた統一体として即座に把握され、すべての教えを有機的全体へと融合していたものが、今や、知的な相互依存として表明されなければならない。要するに、必要とされるものはまさに、彼自身はまさにそれ 자체であるがゆえにまではいじらしく、そういう秩序・方式の枠組みなのである。さもなければ解説は役に立たず、話を聞きに来た友だちは手ぶらで立ち去らざるをえないであろう。

私がこのことを痛感せざるをえなかつたのは、一年前、とりわけクリシュナムルティの教えに興味をそそられ、しきりに知りたがつていていたある友人がやつて来て、彼の教えのどこに他の教えにない新しさがあるのかと彼に訊ねられた時である。未来の時代に人々がクリシュナムルティの生涯とメッセージを振り返つて見る時、スピリチュアルな人生哲学への彼の偉大で卓越した寄与として、彼らは何を指摘するだろうか？

私は自分がどう答えたか忘れたが、しかしそれが絶望的なほどしどろもどろで、不適切であつたことを知っている。クリシュナムルティと彼のメッセージとの数年間にわたるかなり密接な接触後、私は自分がその教えを一個の生きた興味ある全体として総合的に把握していなることに気づいた。そこで私は、その教えに取り組み、なんとかして真相を見極めてみることに決めた。こ

の点で、私に投げかけられた質問をテストケースと見なした。それは、いやしくも真面目な学徒だつたら明瞭な答えを返すことができるべき質問だと私は感じたのである。その上、それは私の興味をそそつた。他のほとんどの学徒同様、私は教えの新しさを感じていたからである。事実私は常に、それらの秘密がそつくり解説されれば、物理学の領域でアインシュタインによつてもたらされた革命に勝るとも劣らないほど画期的で遠大な何かをクリシュナムルティが彼自身の分野で成し遂げたことがわかるであろうと感じていた。が、何を彼が成し遂げたかを正確に言うことはできなかつた。

この問題について数ヶ月間熟考した後私は、一九三〇年六月、エルダー城〔訳注　一九二九年に星の教団　が解散されるまで、教団の拠点として使われていたオランダの古城〕に行き、そこで一夏を過ごした。到着後三週間ほど経つたある日の朝、（城のまわりに掘つた）壕を見下ろすあずまやの一つでいつものように仕事していたのだが、なんのはつきりした考えも浮かばぬまま、一二、三のとりとめのない文章を書いていた。しかしながら、私がこれらにざつと田を通した時、私が追求していくもののヒントをそれらが含んでいるということを、非常にぞくぞくする思いとともに見出した。それ以来、そのヒントに含まれている可能性を伸ばすべく苦心してきた。この論考はその結果である。

言うまでもなく、この論考にはいかなる権威づけも目論まれていないし、また、これが全部の真理を明らかにしたともし私が想像したら、傲慢のそしりを免れないであろう。これはあくまで一学徒の試論であり、大きな主題の周縁に触れたにすぎない。私に言えることはせいぜい、こ

の論考で解明しようとした中心的論点が私にとつて個人的に啓発的であり、そしてクリシュナムルティの教え全体の理解へと少し近づくのを助けてくれたということだけである。この試論は、すでに述べた問い　どこにクリシュナムルティのメッセージの偉大な新しさがあるのか？　未だの時代は、スピリチュアルな人生哲学への彼の卓越した寄与として何を指摘する見込みがもつとも高いだらうか？　に対する答えを出すための実験的試みと見なされてよいであらう。

### 追放された存在としての人間

世界中のあらゆる個人は、周囲を見回す時、自分のことを広大な自然に取り囲まれた一個の生きた存在として意識し、さらに自然はその彼方の究極のリアリティ「訳注　神、創造主、真実在など」に依存していると感じる。そしてまた彼は、このリアリティは、もしそれが理解されさえすれば、自然の意味と目的を明かし、そしてこの解明によって、全体の部分としての彼自身の意味と目的を派生的に明らかにするであろうと感じる。言い換えれば、包括的なスピリチュアルな真理は、これら三項を以下の順序で一つの有機的総体の部分として相関させるであろう。それは、自然を究極的リアリティが顯現する場として説明し、また、人間を自然の一部として、自然自体の生命の意義に彼を関連させることによつて説明するであろう。で、このようにして、それは自然の中に入間にとつてのわが家を見出すであろう。彼女（自然）は彼の母になるであろう、他所者ではなく。そして、まさに彼女の生命が働き出す過程が、彼自身のスピリチュアルな自己実現の過程

になるであろう。

そのような真正の自然哲学を、人間の中のあらゆる詩的・神秘的な部分が切望してきた。彼の中には、自然を犠牲にして求められるべきものとしての真理ではなく、彼を自然の中に包み込むべき存在としての真理を求める深い本能が常に存在してきた。人間は、心の奥底では、自然界から追放された存在であろうとは願っていない。たとえそのような存在であることが優越のしるしと解されようと。いかなる孤高のプライドよりも、母なる自然の呼び声のほうが常に強かつたのである。人間のもつとも内奥の魂は、彼自身の自己実現を自然的生活によつて解放するであろう哲学を求める。自然の外においてではなく、その中において、彼は自分のスピリチュアルな運命を開拓しなければならないのである。

### 諸宗教の答え

が、過去の宗教的・スピリチュアルな教えは、人間が所期の目標に向かうのをどのように助けてきただろう？例外なく、それらは彼を自然から分離してきた。なぜならそれらは、自然の中で、またそれを通じてのリアリティの働きを、人間の問題に適用しうる用語に翻訳することができなかつた（または翻訳せずにきた）からである。三項 リアリティ、自然、人間 を生きた有機的連鎖へと相互に関連させ、自然をリアリティに依存させ、人間を自然に依存させるかわりに、一種自暴自棄になつて、非常手段で難問題を解決すべく、人間を究極のリアリティに直接

関係させ、介在する自然とは基本的に無関係にするか、または単に否定的に関係させるに至つたのだ。つまり、過去の宗教的・スピリチュアルな教えは、人間のスピリチュアルな自己実現を、自然に対立して、またはその外側で成し遂げられるべきものとして説いてきたのである。それは人類に、真の人生を探すためには、顯現した事物の秩序ではなく、顯現した世界の外側またはその彼方に目を向ける必要があると教えてきた。要するに、それらは、リアリティと人間との間にの中間項としての自然的秩序を廃止してきたのである。三重秩序の経験を全体として調和させることができたであろうあの理想的総合が、真ん中で断たれてしまったのだ。自然から人間へと下降する一個の有機的真理であるべきだったものが、短絡させられてしまったのである。人間はもはや、母なる自然の手からスピリットの贈り物を受け取らない。彼はそれを、リアリティから直接求めるよう告げられるのだ。

### 理由

なぜこうなってしまったのだろう？なぜなら、過去のすべての偉大なスピリチュアルな教えにおいては、リアリティと自然との関係は、自然から人間に手渡されるものが何もないよう仕組まれてきたからである。これらすべての教えは、人間にとつてのスピリチュアルな自己実現はスピリチュアルな幸福を意味し、また、至福への彼の深い本能的 requirement を否定したり無視したりする、いかなる人生問題の解決も容認できないということを認めてはいたが、しかし根本的に幸

福な自然観からわき出さないようないかなる真正の「幸福の福音」もありえないということを認めそこなつていた。

おしなべて、それらは顕現を不幸なものにしてしまい、したがつて、幸福を自然ゆえにではなく、自然にもかかわらずあるものと説いてきた。自然は、万人にとつて敵であつて、友ではないのであつた。そして、このように考えて、それらはリアリティと自然と人間の間の連続性を断ち切つてきた。人間とリアリティを直結させ、自然を外側に追いやつたのである。

### 中和と逃避の教え

これが本當である」とは、ほんじ論証を必要としない。すべての容認された宗教の根底には、実現されていないもの・はるか彼方のもののために現実を否認する傾向があつた。それらすべては一様に、形態と物質の中の生は根本的に監禁であり、顕現は重荷であつて、それゆえ、ありのままの事物の世界にではなく、何か他の存在秩序の中に幸福は見出されるべきだ、という仮定から出発している。したがつて、それらすべての宗教は、人間にとつてのスピリチュアルな自己実現を、「中和neutralization」または「逃避escape」の点から説いてきた。彼は、重荷の重さを感じないでいられるほど充分に強い何らかの能動的原理をみずからの内部に据えることによつて、重荷を中和させることができるか、または、重荷をかなぐり捨てて、それから逃げ出すことができる。これら二つの代表的な解法のいずれかに、過去のすべてのスピリチュアルな教えを分類す

ることができる。中和の宗教は、人は生存の重荷を感じないでいられるほど強く愛することができる、または、重荷を試練と見なすことによって、それをその功利的な側面において、何らかの異なる人生への準備として迎え入れることができると説いてきた。逃避の宗教はそれよりはるかに断固としていた。「今すぐ逃げ出しなさい」がそれらの宗教のスローガンであった。「顯現の全秩序に背を向け、あなたの実現を純粹な非顯現の存在の領域において求めよ」。

ここでは例証する余地はないが、もし読者が世界の諸宗教にざつと目を通してみれば、形態と物質の中の生に固有のこの厭わしさの感情は、全時代を通じて世界のスピリチュアルな生活の基調であつたということに同意されるであろう。その生活の根底には、「今・ここ・これ」についての深いペシミズムがあつた。そして幸福に至る可能性についてどのような希望を人類が抱いていたとしても、すべては、あれこれの仕方で「未来・そこ・それ」の言語に翻訳されてきたのである。

### 神祕主義とオカルティズム

顯現した秩序についてのこの基本的に不幸な見方において、神祕主義とオカルティズムという、自己実現についての概念的プログラムにおいてかくもかけ離れた思想流派が共同戦線を張つてきた。神秘家にとってと同様にオカルティストにとっても、形態と物質の中の生はまさに自由の否定なのである。両者ともに、それぞれのやり方で、その生から非顯現の世界へと逃避すべく努め

てきた　極端な神秘家は、外面向的な事物の世界を徹底的に拒否することによって。オカルティストは、一連の漸進的な拒否によって。それによって彼は、一つの顯現の秩序から他のそれへと、離れたばかりの秩序を一步一步拒否しながら、顯現の重荷がより執拗ではなく、物質がより微細で、より堅固ではなくなる、そういう存在の領域へと絶えず上昇することをめざし、かくして、結局は頂上にある自由に至ろうとする。両者にとって、解放は、その究極的または形而上の意味では、顯現からの完全な逃避によつてのみ成し遂げられるのだ。ある眞の自由のみがありえ、そしてそれは監禁域<sup>ブリス・エリア</sup>の外側にある。神秘家はこの自由を、壁を突破することによつて求めようとする。オカルティストは、彼の監獄の階から登り、とうとう屋根の上に踏み出すことによつて。相違は単に方法のそれにすぎない。ともに自然または自然の秩序を拒み、その外に生の実現を見出す。ともに、最後の手段として、事物のありのままに對して積極的に抗議する。では、こうしたすべての中和と逃避の哲学がしてきたことは何であろう？

### 人間の追放

それらは、人間を自然の秩序から引き離すことによつて、彼を自然の中の流浪者、自然からの被追放者にしてきた。なぜなら彼らは、この秩序を、人間自身のスピリチュアルな生活に相反するものと解釈してきたからである。この秩序内の住人として、彼は周囲を見回し、顯現界のすべての驚異と美に目をとめる。彼は四季の移ろいや、変わりゆく豊かな野や森や丘を見る。頭上

の天の莊嚴と、足下の地の莊嚴を見る。このすべてを彼は見、そして多分、彼の心の隠れた場所で、哲学よりも深い深みで、ある埋もれていた血縁関係の本能がわき上がり、「私はこのすべてのものの一部だ」と感じる。が、それから彼は自分の哲学を思い出す。彼の宗教が彼に教えたことを思い起こして、悲しげに言う。「いや。肉体的には私は自然の一部だが、しかし精神的には私は異邦人だ。なぜなら、私が求めている絶対的な生にとって、このすべては重荷、監禁以外のなにものでもないからだ。自由で、かつ、顯現していないう状態にあるその生の觀点からは、花、木、石の中のこの顯現は不幸である。なぜなら、それらの中に入ることによって、絶対的な生はそれ自体の自由を否定するからだ。で、私もまた自由、絶対的な生を求めているので、私が求めているものをここ（花、木、石の中のこの顯現）に見出すことはできないのだ」。したがつて彼は自然から顔をそむける。子としてのあらゆる本能にもかかわらず、彼は彼女（自然）の中に母を見ることができないのだ。彼は彼女の中にスピリチュアルな幸福を見出すことができない。まさに彼女の存在自体が、絶対的な生にとっては不幸なのである。

かくのこときが、中和と逃避の哲学の結果である。それらの見地では、リアリティはその祝福を、自然を通じて人間に伝えることはできない。なぜなら、自然はその祝福の否定だからである。リアリティは、自然を通じてその自由を人間に伝えることができない。なぜなら、自然はその自由を取り去ったからである。したがつて、顯現の世界の中では、人間はスピリチュアルな余所者に留まる。彼は自然からの相続権を剥脱されたのである。自然が与えるものが何もないという単純な理由のゆえに。

もし物事がその逆であつたら

が、もし物事がその逆であつたら？ もし顯現が、監禁状態への転落と見なされるかわりに、喜ばしいことと見なされることができさえしたら？ もし 絶対的な生 が、単に虚無の中に見出されるかわりに、そのすべての純粹さと自由において、形態と物質によつて押しつけられた状態の中に見出されることができさえしたら？ もし人間の中の生命の働きが、自然の中の生命の働きを引き継ぎ、実現したものであることができさえいたら？ もし究極的幸福の実現が、顯現にもかかわらずではなく、顯現のゆえに可能であるとしたら？ で、もしその幸福がいつか未来にではなく、「今・ここ・これ」に属しているとしたら？ その時にはすべてが違つてくるであろう。物事の連續性は、その時にはさえぎられず、そして自然是もう一度リアリティと人間との間の中間項としての地位を占めるであろう。彼女を通じて、リアリティは人間に流出してくるであろう。そして彼自身のスピリチュアルな自己実現を成し遂げることによつて、人間はみずからを通じて自然の目的を達するであろう。こうして、眞の「自然宗教」、「ありのままの物事の宗教」が発達し始めるであろう。拒絶の宗教は受容の宗教にとつて代わられるであろう。ついに、詩人や夢想家たちが夢見てきた「自然なる生」が可能になるであろう。スピリチュアリティの歴史上初めて、自然は人間のわが家になつてゐることであろう。

## 何をクリシュナマルティはしたのか

さて、もしわれわれがクリシュナマルティの教えの根本原理まで突き詰めれば、彼の教えがわれわれのためにしてきたことは、まさに以上述べたすべてのことであることがわかる。クリシュナマルティの哲学の新しさは、私はそれがいすれスピリチュアルな思想の新時代を画したものと認められるであろうと感じているのだが、彼が、私が話していた有機的連鎖を復活させたことにある。彼は、自然ないし顯現を、リアリティと人間との間の媒介項としての座に再び据えなおしたのである。そして彼がこれを成し遂げたのは、スピリチュアルな天才の眞の本能でもつて、ぜひ必要なものとして先ほど述べられたばかりのあらゆるものをおわれわれのためにしてくれたことにある。それはわれわれに、生またはリアリティの觀点から、なぜ顯現が幸福なものであるのかを示してくれる。それはわれわれに、絶対的な生　他の哲学は、その自由は顯現の外側およびその彼方においてのみあるとしか示すことができなかつた　は、顯現の中でその純粹さを少しも損なうことなく見出されるはずだということを示す。それはまた、人間のスピリチュアルな自己実現は、これまで自然に反抗して成し遂げられなければならなかつたのだが、一転して、すでに自然の中で働いている何かを人間が単に引き継ぐか、伝達されて続けることによって、成し遂げられるはずだということを示す。とりわけそれは、人間の内なるスピリット　がその生得権として知つてゐる究極のまたは形而上の幸福と自由が、いかにして「ありのままの物事」の世界でかち得られるものであるか　それをかち得ることが可能になるの

は、形態と物質の中の生命の状態の中で、またそれを通じてのみであるか を示す。クリシュナマルティによって説かれた絶対的解放は、顯現からの自由ではない。それは、顯現の中への解放なのだ。このように、クリシュナマルティの教えでは、 存在 のすべての流れは同じ方向へ流れしており、リアリティが自然を通じて成し遂げていることを、自然は人間を通じて成し遂げているのである。それゆえ、人間は自分の自由を自然の外側に探す必要はない。彼は、まさに彼女の存在に組み込まれている。彼の目的と彼女の目的は一つなのだ。

### いかにして変更が可能になつたのか

いかにして顯現についての全概念のこのとてつもない変更がもたらされたのだろう？　それは単に、すべての顯現した存在の根拠と見なしうるあの究極のリアリティの記述の仕方を変えることによつて可能になつたのである。

みずから根拠を形而上学に立脚させるべく努めてきたすべてのスピリチュアルな思想は、通常例、この絶対的リアリティをまったく純粹さと静けさの状態にある 存在 、いかなる制限によつても汚されておらず、そよとの動きによつても乱されていない 存在 の無限の海として思い描き、したがつてわれわれが「顯現」と呼んでいるもの、すなわち、物質と形態の中への生命の出現を、この絶対的静けさと純粹さへの侵入と見なしてきた。この観点からは、すべての顯現は制限である。なぜなら、それはあの原初の存在からそのすべての属性を失わせるからである。無限

が有限に取つて代わられ、絶対が特殊に呑み込まれ、無形のものが形態によつて束縛され、条件づけられるのだ。無条件なるもののが、今や無数の条件のとりこになる。無制限なるものが、無数の事物の性質を帯びる羽目になる。したがつて、まさに顯現の中に入るという行為によつて、リアリティはそれ自身ではなくなるのである。それは、存在から現実へと移行することによって、何かをいや、あらゆるもの喪失したのだ。逆に、顯現した領域内に閉じ込められている生は、もしそれが顯現界から出てそれ自身の原初の状態へと戻れば、その時それは何か（またはあらゆるもの）を取り戻すかまたは再発見すると見なされなければならぬい。

### 重荷としての顯現した生命

この種の哲学にとって、形態と物質の中の生命は必然的に制約である。もし密度が増える順に漸次下方に続いていく物質度があるとすれば、形態と物質の中に吹き込まれる生命は、とうとう物質界で最後の幽閉状態の間に至るまで、物質度が増す順にますますきつい監禁状態に陥ることになる。この結果、人間は、物質的条件のただ中で生きる肉体におわれた存在として、言わば、まさに最果ての制約の岸辺に打ち上げられ、放置される。で、そこには、もし彼が自分のスピリチュアルな生得権と感じているあの失われた存在の純粹さに戻りたければ通過すべき、顯現のすべての層が介在しているのだ。

「」の「顯現惡夢」説を免れ、人間を彼の「はるかなる目標」から救出し、生の純粹さと絶対性との彼の直接的接触を回復するためには、部分的ないかなる処置も不十分であることは明らかである。物事の始まりにまっすぐに立ち戻つて、顯現についてのわれわれの全概念を再構築する必要があるであろう。明らかに、「制約」觀は去らなければならない。リアリティと現実との根本的関係が言い換えられなければならない。一方から他方への移行によつて引き起こされるものとしてのいかなる「喪失」または「監禁」という考えも偽りであることが示されるような仕方で言い換えられなければならない。絶対者は、自己を顯現させることによって何も失つてはならないのだ。物質がなんら制約ではないことが示されなければならない。原初の 存在 の純粹さは不变のままであることが示されなければならない。要するにわれわれは、「顯現の内なる絶対性」説を構築しなければならないのだ。そのような絶対性は、物質と形態の宇宙の外側・彼方にのみ、またはそれに先立つてのみ見出されるという、一般に容認された説のかわりに。

問題は、いかにしてこれがなされるべきか、である。やり方は一つしかない。ただ一種類の方式だけが、われわれが必要としているものをわれわれに与えることができる。そしてこれは、クリシュナムルティの全哲學の基礎を成してゐる方式である。われわれの最も究極のものは、<sup>スタティック</sup> 静的であることをやめ、<sup>ダイナミック</sup> 動的にならなければならない。われわれは、リアリティを動き出させなければならない。つい先程述べられたものとしての 純粹存在 の方式の代わりに、 純粹創造 の方式を用いねばならないのだ。

クリシュナムルティの教えは、根本的な創造性の原理の上に宇宙を再構築する。 生 または

リアリティは、純粹存在と思いつ込まれるべきではない。それは純粹活動である。あらゆるものの中には、顕現の全宇宙の外および彼方まで、われわれは静けさの海ではなく、永遠の運動を思い描かなければならない。そしてその運動は創造である。創造は生であり、在ることは創造することである。創造を取り去れば、生それ自体が存在しなくなる。

結局、われわれが「顕現」と呼んだものはまだ活発に創造している「生」であつて、リアリティの搅乱または限定ではない。それはリアリティの自己表現である。みずから創造性を解放し、ひいては実現しつつある創造それ自体である。それは、実際に発現すべく自由にされた、創造的に発現しようとする衝動である。ではなぜこの衝動があるのかともしわれわれが問われたら、にわかには答えられない。あえて言えば「創造のための創造」であり、そうとしか言いようがないのだ。この先には最も深い形而上学も貫入できない。なぜなら、それ以上先はないからである。さて、創造としての生の公式の意義は、それが本来的に解放させる力を持つているということである。顕現の全宇宙を、これまでその下で苦悶していた重荷からたちどころに解放する力を。それは、形態と物質の世界にリアリティの新鮮な息吹を導き入れ、隅々を吹き抜けさせて、すべての制限を洗い流せる。クリシユナムルティの宇宙では、常に物質度を増すいかに多くの層があること、絶対者はもはやどこか遠くにある抽象物ではない。そのような累進的な密度の増加にもかかわらず、創造性は変わらずに留まるのだ。このことを理解するため、彫刻家に登場してもうひとつじみてみる。

## 創造的活動

「クリシュナマルティの教えにおける人間、自然、リアリティ」

彫刻家は大理石で創造する。が、それよりずっと堅くなく、また扱いにくくない材料で行う、他の創造的活動がある。それらのいくつかを、「最も稠密なもの」から始めて順に上向きに並べてみよう。彫刻家は大理石で創造し、画家は顔料で、音楽家は音で、そして哲学者は觀念で創造する。が、彫刻家の「創造性」は、画家のそれ、音楽家のそれ、あるいは学者のそれより劣るだろうか？　言い換えれば、創造性は物質の密度が増すにつれて減少するであろうか？　明らかに「否」である。大彫刻家は、彼自身のやり方で、大音楽家と同様に創造的である。相違は単に技法のそれであつて、すべての技法は、その性質上、用いられる材料によって左右されざるをえない。再び、大理石は、創造の媒体として、言葉が詩人にとつて、または色が画家にとつてそうであるよりも「解放をもたらす」度合いが劣るだろうか？　それは、自己表現によつて彼の造形行為と創造的觀念を解放させる上の有効性の点で劣るだろうか？　明白な答えは「否」である。解放はすべての場合に同じであり、用いられる特殊な技法とも特殊な材料とも無関係である。これは顯現した宇宙全体にも言える。もしわれわれが　創造としての生　の公式から出発すれば、生　は、それが扱わなければならぬあらゆる等級の物質度の中で等しく創造的であり、それゆえそれ自体であり続ける。つまり、そこにあるのは一連の異なる創造的技法であり、そして技法の相違は、すでに見たように、創造的目的が物質と形態の中に表現を見つける時にはいつでも、すべてのレベルで起こる創造的「解放」にはなんの影響も与えない。これが、顯現の究極的幽閉

状態からの超越をめざすあの形而上の「顯現惡夢」説に対する答えである。創造としての生は、その中に無数の特殊物が消散あるいは溶解しうる、単に青ざめた（生氣のない）宇宙ではない。それは、生きたエネルギーとして、あらゆる具体物の中にある。一枚の葉を摘んでみれば、それはそこにある。あなたが石を一つ拾い上げれば、あなたはそれを掌中に収める。われわれの周りの世界はもはや牢獄ではない。それは風と青空に通じてゐる。リアリティは他所者ではなくなり、そのすべての純粹さのまま、われわれの戸口までやって來たのである。

### 創造としての生

これをいかにしてこの 創造としての生 の公式が成し遂げることができ、またどのようにしてそれがまさにクリシュナマルティの哲学自体に組み込まれたのかを理解するために、「こゝありふれた事例を引き合いに出して検証してみよつ。この事例は、 純粹存在としての生 からこの創造としての生 への单なる変化が、かくも長い間われわれのスピリチュアルな思想に影響を与えてきた「顯現重荷」説全部をあつといつ間に廢止し、またこの廢止によつて、「中和」と「逃避」という、これまでの古い見解の下で論理的に可能だつただ一二つの代替的方法とは原理的にまったく異なるスピリチュアルな自己実現のプログラムへと、いかにしてわれわれを導くかを示してくれるだらう。

ひとかたまりの大理石を考えてみよう。それを肩に担いでいる人にとっては、そのかたまりは重荷であり、疲れさせるもの以外の何ものものでもない。そして彼がそれからの救いを得ることができるやり方は二つしかない。第一は、彼がその重量を感じなくなるほど不思議な、それを運ぶための感情的誘因を持つているかも知れない場合。したがって、彼は、緊急にそれを必要としている人で、彼がとても深く愛しているので、どんな奉仕も それ自体はいかにうんざりさせるものであろうと 喜びになる、そういう人のところに運んでいくかも知れない。あるいは、彼は、他の人がそれを運ばないですむように、それを運んでいくかも知れない 彼の動機はここでは同じである。あるいはまた、自分の筋肉を発達させるために、体操としてそれを肩に担いでいくかも知れない。その場合彼は、それが彼にしてくれる最終的な良いことのために、直接的な辛さに耐えるであろう。これらすべては「中和」の道に属する。そこには依然として重荷はある 質量と重量というその顕著な特徴は残るであろう が、しかしこの側面は相殺され、何か他のものによって打ち消されたのである。他的方法は、より単純で、より直接的である。それは、肩からかたまりを外して、地面に落とすことである。これは「逃避」の道である。しかしながら、ここでさえも質量と重量が関連した事実として残る。かたまりはもはや運ばれないが、しかしそれが落とされたのは、その質量と重量ゆえである。

しかしながら、ここにある人があり、彼にとつては大理石のかたまりは重荷でも障害でもない。

なぜなら、その意味合いは彼にとつてはまったく異なるからだ。彼にとつては、それはまさに解放の手段であり道具である。その人は彫刻家である。彼に大理石のかたまりを与えれば、他の人にとつてそれを重荷にしていたのと寸分違わぬ性質が、彼の芸術の不可欠の条件と見なされるのだ。硬さと大きさは制限したり圧迫したりする要因ではなくなる。なぜなら、彼が創造することができるには、まさにこれらによつてだからである。それゆえ、かたまりの運び手によつて「耐え難い負担」と感じられていたすべてが、単に運ばれるべき何かとしてではなく、創造的に形作られるべき何かと見なされる時は、解放させるものになるのだ。それは依然として同じかたまりだが、その性質または意味合いは完全に変わつたのである。

### 易々たる達成

これと同じことが顯現にも言える。リアリティと顯現との従来の静止的関係を創造的関係に置き換え、形態と物質を、顯現した宇宙によつて單に「担われる」べきものと見なすことをやめれば、われわれは直ちに宇宙の全面的再評価を遂げることになる。制限と思われていたものが、今や解放の不可欠の条件になる。以前は重荷・監獄以外の何もなかつた場所に、今や「自由」な宇宙を持つのだ。そしてその自由は、少し前に言及された累進的顯現を通してあり続ける。創造としての生の觀点からは、そのようなすべての度合いは的外れである。そのすべてにおいて、それは等しく創造的である続けるのだ。創造による解放はすべてにおいて同じなのである。

さしあたりわれわれは「解放」について話しているので、さらにこう自問してみよう。創造の見地からは、何が絶対または完全な解放を構成するのだろう？ 創造の目的に関するかぎり、間違いなくそれは、用いられた材料の中で働いている創造的観念または意志が、この材料が必要とする特殊な技法によって、それ自体の完全な自己実現を成し遂げる時である。なぜならこれは、観念とその実現との間にいかなる障害物も介在しなかつたことを意味するからである。他方、創造のプロセスに関するかぎり、そのような自由が最高度にあるのは、創造的エネルギーが完全に易々と自発的に働く時 楽々と、かつ的確にそれがめざしているものを達成する時 である。このように、易々と自発的に完成を遂げることが、創造的自由の十全な公式である。

われわれの顯現した宇宙の哲学では、生 がそれ自体の内側で、易々と自発的な完成を遂げつつ創造しているということをもしわれわれが示すことができれば、これは、その宇宙の中で創造しているという意味で、生 は自由であるということと同じことであろう。ここで問題になつてゐる自由は創造的自由であり、それは、あらゆる場合に、たまたま 生 の働きの場になつてゐる材料の中で、またそれを通じて サラにその材料を用いるテクニツクによつて 実現され、しかもそれによつてそれ自体の純粹さと完全さを少しも失うことはないであろう。そうしたあらゆる完成した達成において、創造としての生 はそれ自体の絶対性を実現するであろう。完成があるところではどこでも、絶対 は解放を見出したと見なされなければならないであろう。

しかしながら、クリシュナムルティの哲学で大きな役を果たしている、「自由としての完成」

といつこの微妙な難問を離れる前に、解明されなければならぬに一いつのポイントがある。その一つは、すべての完成の特殊性に関わっている。もう一つは、いざれか任意の完成と、生の全体との関係を扱っている。いずれの場合にも、われらが彫刻家が再び例証に役立つてくれるであろう。

### 完成は特殊のもの

もし彫刻家が仕上げた彫像が生きた人間の機能を備えていなければ、それが考えたり、動いたり、話したりできなければ、それ以外のすべての点では完璧でも、完成しそこなつてみると見なされるべきであろうか？ 明らかに「否」である。彫像の完成は特殊な種類の完成である。彫刻術に特有で、その術に固有のもののみを含んだ。再び、われらの彫刻家が乞食の老婆の写実的半身像にとりかかっていると仮定した場合、その半身像が完成した時、単にそれが女神アーティーまたはアフロディーーの理想化された半身像よりも美しくないというだけで、彼はその制作意図の点で 完成しそこなつたと見なされるべきであろうか？ 再び「否」である。なぜなら、任意のいざれかの芸術作品の完成は、その特殊な作品の完成だからである。そして、これ以上のいかなるものもそれには要求されない。そのようなあらゆる完成は獨特のものであり、それと他の完成との間には、主題の優劣の格付けに基づいた比較評価はありえない。そういうものとして、女神の完璧な彫像は、乞食の完璧な彫像よりも多く「完成」しているわけ

ではない。

こうしてわれわれは、完成は常に特殊のものであるという重要な一般化を得る。各々のものにそれ自身にふさわしい完成があり、そしてそのような各々の完成はそれ自体にとって十分なのだ。したがつてわれわれはもう一度あの 絶対 の觀念 それ自体の絶対性を少しも失うことなく、特定の創造的行為の範囲内で実現しうるそれ に戻る。この觀念は難解だが、しかししつかりと固執されなければならない。なぜならそれは、「創造性」の公式から出てくる最も重要なものの一つだからである。

さらに、生きた創造的個性の持ち主である彫刻家は、もちろんどの作品でも完成をめざしていると仮定してであるが、 彫像によりも小彫像に、あるいは派手な作品によりも地味な作品に、その生きた個性をより少しあなげ込んでいいと見なされるべきであろうか？ 明らかに否である。それらのどれにも彼は自分自身の全部を投入しているのだ。彼は不可分の個人として創造しており、完成された作品は、いかに規模が小さかろうと、いかにテーマが地味であろうと、全人の表現として仕上がっている。その上、そのような大小のあらゆる作品は、創造的觀念の「解放」と見なされた場合、等しくかつ同様の解放である。各々の場合に、もし作品が完全に成し遂げられたなら、全面的な解放がある。かくしてわれわれは、遠大な哲学的価値のもう一つの非常に重要な一般化を得る。すなわち、創造的な生 はあらゆる創造的行為の中にみずからの全部を実現し、解放するが、にもかかわらず、永久に無尽蔵であるということ。また、絶対は、特殊物の中にそつくり入り込み、みずからの絶対性をそれに付与することができるが、にも

かかわらず同時に他の無数のそのような特殊物の中にも等しく入ることができるといふことである。要するにわれわれは、創造の用語に翻訳された宇宙では、特殊物は、もしそれが表現することになっている觀念を完全に体現していさえすれば、それはそのまま絶対であり、また、そのように完成された特殊物の中で創造的な生の全部が実現され、このようにしてみずからを実現することによって自由を遂げるという、最も深く、最も啓発的な真理を解明したのだ。

そこで、最後の数節の結果をまとめさえすれば、クリシュナムルティによつて翻訳しなおされたものとしての宇宙の主要原理を把握できる。そしてこの生は、形態と物質のあらゆる見かけの制限にもかかわらず、常にそうであったように、絶対的で、純粹で、自由のままだということを彼がわれわれに示すことができるは、これらの原理を創造的な顯現の中の生に適用することによってなのである。彼はわれわれにこう告げる　自然はリアリティの牢獄ではない。それはむしろ、自由にされたリアリティまたは生なのだ。大理石のかたまりが彫刻家にとつて意味していたのと同じことが、創造としての生に対する形態と物質の関係に言える。それらは、自己実現と解放の不可欠の条件なのだ。物質密度の増大もこの創造的な自己解放を左右しない。それは技法の相違を課すかもしれないが、しかし等しく創造的解放をもたらす。言い換えれば、われわれの物質界のリアリティは、より高い世界で見出されるそれに劣らずリアリティである。われわれのまわりの事物の世界において、創造的な生は、ある種の限りなく微細な物質の世界においてとまさに同様に十分に存在しており、十分に解放されている。なぜなら解放は、その創造的な側面において、用いられている材料からも、この材料に伴う技法からも独立してお

り そして、すべてにおいて等しく真実で十分だからである。

ただ一つのことが創造的自由を促すかまたは損ないうる。つまり、それは、吹き込まれる創造的觀念を十分にかつ純粹なまで実現するかしないか次第なのである。創造にとって、完成が唯一の自由であり そして最高の自由は、自發的に、易々と成し遂げられた完成である。そしてこれこそはまさに クリシュナマルティは教える われわれのまわりの自然内のいたる所に見受けられるものである。あらゆる自然物の完成において、われわれのまわりの顯現した世界は（創造性の言語で）、自然物をその表現とする 生 の絶対的自由を贊美しているのだ。

自然の中のどこを見ても、われわれは創造的芸術作用が働いて、それ自体の創造的觀念の完璧な體現を、自發的に、苦もなく成し遂げているのを見出す。そしてここでクリシュナマルティは慎重にも、この完成の概念をそうではないものと混同しないように指摘する。美しいものは、それによって醜いものよりもより「完全」であるわけではない。より進化したものは、それによつてより進化していないものよりもより「完全」であるわけではない。完成は、あらゆる場合に、事物または創造物が、それ自体の場所で、また、それ自体の種類に従つて、完全かつ正確に、みずからがあるように目論まれているものであることがある。

ここで、彫刻家について言われたことが慎重に思い出されるべきである。ただし、それを顯現の全部にそれを適用するには、若干言い換えたほうがよいであろう。

「自然なる完成」 それによつて生きた顯現界内の事物の完成が意味されているのだがを考察することによつて、われわれはそれがありうる以上のものであるべきだと要求してはなら

ないとクリシュナマルティは教える。なぜなら、その完成は事物が厳密にそのあるがままにあることにより、それ以上ではないからである。かくして、われわれは石が植物ではないからといって、あるいは植物が動物ではないからといって、石あるいは植物を咎めてはならない。各々の「完成」はその種類に従っているのだ。あるいは、「完成」に関して、ある物が他の何かより肌理が粗い、あるいは美しくない、あるいは心地よくないからといって、それを咎めてはならない。火打石は、ダイヤモンドではないが、それ自身の完成を持っている。ヒナ菊は、たとえそれがバラではなくとも、それ自身の完成を持つている。上に述べられたように、各々のものにそれ自身の完成があり、そしてこの完成はそれ自身で十分なのである。それゆえわれわれは、自然の中に唯一の完成を探し求めるもならないし、客観的性質に基づいた一般的な完成の基準を求めてならない。われわれは無数の完成を探し求めなければならないのであり、各々の事物、あるいは事物の種類に固有の完成があるのである。そしてこれらの完成のどの一つをも、われわれはそれ自身で完璧であり　他のいかなる完成にもなにひとつ負わず、いかなる比較または分類の企てにも絶対的に逆らう　ものと見なさなければならない。要するに、各々が絶対なのだ。各々の中に　創造的な生　の全部が入り込み、その中でその実現と解放を見出すのである。

## 自然性

ところで、これは、自然の中の個々の事物の完成はその「自然性」にあると言つことなんら

異なるのではないだろうか？　あらゆる被造物は、それが自然にあるところのものである」とにおいて完全になる。ヒナ菊は、その種類に従つて「自然性」を実現し、「完全」になる。そのように、微塵から人類の手前まで、自然の全域にわたつて、「自然性」と「完成」が同一歩調をとつていることをわれわれは見出す。人類においてのみ、初めてこの法則は通用しない、あるいは通用しないように思われる。が、それについてはいずれ触れるであろう。さしあたりは、その法則は結局は人類にも通用するのだと付言しておけば十分であろう。一見して通用しないように思われるのは、創造的な生に対立する人間の中の何か他のものが、一時的に彼を「不自然」にするからである。後でその異質な要素が乗り越えられ、創造的な生が、その全き純粹さで再び人間の中で放免され、「解放」と呼ばれるものを彼が成し遂げた時、彼は「自然」になり、したがつて再び完全になるであろう。

### 生に対するダイナミックな見方

以上が、クリシュナマルティの教えの中にわれわれが見出す、「完成」としての「自然性」の概念である。その十分な意味を解明するためには、それについてかなり長く詳述する必要があるであろう。が、ここではさしあたり、それがリアリティと自然ないし顯現との関係にどう関わっているかにだけこだわることにしよう。この関係がどういうものかを指摘するために、多分、十分に多くのことが言われてきた。クリシュナマルティは教える　　生　あるいはリアリティは、

顯現界のあらゆる場所において自由かつ絶対である。あらゆる被造物は、自然の秩序内で、みずからの中に吹き込まれた創造的觀念の純粹な表現であるといつ、単純な理由のゆえに。単にそのあるがままであることによつて、単にそれ自体の「自然性」を実現することによつて、それは、それを形作り、形成している 創造的な生 にとって、顯現し、完成を遂げているのであり、したがつて（創造性の言語で）自由な存在なのである。形而上学的に言えば、そのようなあらゆる事物は究極のものである。それは、絶対的な純粹さで 生 の自由と豊かさを顯わすのだ。

かくしてわれわれの宇宙は放免される。いわば 生 についての 静的 <sup>スティック</sup>な概念を、動的 <sup>ダイナミック</sup>な概念に取り替えることによつて、顯現の全構造に緩みが生じ、以前は闇に閉ざされ、息を止められていた場所に、光と新鮮な空気が入り込んだのだ。自然を人間とリアリティの間に介在する障害物 人間のスピリチュアルな切望に敵対し、人間存在の最も深い本能と相容れない障害物にしてきた重荷と圧力が、これを最後にすべて廃止されたのである。もはや人間は、重荷を中和することによつて彼のスピリチュアルな自己実現を企てる必要はない。なぜなら、今や中和すべきいかなる重荷も残つていないのである。彼はもはや逃避を企てる必要はない。なぜなら、今や逃避すべきいかなるものも残つていないのである。彼が求めているリアリティは、もはや他所者ではない。それはここに、彼のまわりのあらゆる所に、あらゆる被造物の自然な完成の中にある。詩人たちが自然について常に夢見てきたすべてのことが、本当になつたのだ。彼女（自然）は今や、「リアリティ、自然、人間」の偉大な有機的総合の中の中間項としての場所を占める」とができるのである。

「クリシュナマルティの教えにおける人間、自然、リアリティ」

これが、人間が自然の中に現われる時、その中に生まれ落ちると思い描かれなければならない宇宙である。すなわち、各々がそれ自身で絶対で、各々が独特的の創造的作用の産物で、その特殊な完成を実現することにもっぱら関心がある、そういう個々の無数の完成物から成る宇宙である。したがつて、事物とそれを創造した 生との間の単純で根本的な関係、および、まったく同一の 生 の現れとしてのそのようなすべての事物同士の単純な相互関係以外のいかなる関係も仮定することのできない宇宙。要するに、その中では 生 それ自体が唯一の共通要因であり、唯一の可能な関係である、そういう宇宙である。これが、リアリティのために存在するものとしての自然であり、その中のあらゆる事物が絶対的な創造的自由のじるしであるがゆえに、また、自然是全体としてそのような事物の集合体であるがゆえに、徹頭徹尾自由な世界である。したがつて、この種の世界では、個々の事物の完全無欠性を束縛し、損ないうるいかなるものもありえず、事物が、その性質、価値、あるいはそれらが仕えることになつている何らかの目的によつて分類されることもない。

### 価値の等級づけの不在

生 がみずから創造した自然を見渡す時、それはいかなる共通の性質も見ず、ただ唯一無二

性（独自性）だけを見る。それはいかなる価値の等級づけも見ない。あらゆる事物は、単にそれ自身であることにおいて、独自の絶対的価値を持つているからである。またそれは、その創造物のいざれかを他のいざれかに縛りつける、いかなる目的も知覚しない。なぜなら、そのすべては唯一の目的を持つており、その目的とは 生 それ自体を表現することだからである。が、これは、ある高さから放たれた水が落ち着き先を求める事と、あるいは、同様に放たれたある固体が地面まで落下することがそれぞれの「目的」と呼べないと同様、目的と呼ぶことは難しい。

生 は、それが 創造 であるがゆえに創造する。それが、われわれが言いうるすべてである。このように、私と鏡の中に映っている私の姿との間に意図的な関係がないのと同様、 創造としての生 とその顯現との間にはいかなる意図的な関係もない。私が鏡の前におり、 ゆえにその中に私の姿が映る。生 は創造であり、 ゆえに自然がある。が、私がガラスの中の自分の姿によつて何も意図しないのと同様に、 生 は自己顯現によつて何も意図しない。

さて、人間の眞の住処であり（もし彼がそれを知りさえすればだが）、その中で彼が自分に定められた役割を果たさなければならない宇宙 目的なき、関係なき宇宙、単に 生 の顯現または表現である以上のいかなる意味も 生 にとつては持たない宇宙 について述べるべく努めたので、次に人間自身について考えてみるとよ。何が彼の役目で、またそれによつていかにして彼はわれわれの有機的三つ組（リアリティ、自然、人間）の第三項になるのだろう？ われわれは、創造としての生 が、それ自体に内在するはずみによつて顯現の中に移行したことを見た。では、さらにこの 生 を同じ有機的自己展開のプロセスによつて遂行し、その自然の中

での単なる顯現を超えて、人間のためにそれを配置する必要がなぜあるのかを見てみなければならない。

われわれが話してきた「自由な」宇宙では、被造物の完成は単純な創造的行為の完結、または極致を表わしている。かくして、たまたま私が手にしているこの特定の花または石を創造した行為は、当該の物の完成または自然性において自己実現または自己完結を遂げ、したがつて自然全体が無数の「完成物」で埋め尽くされていると見なされなければならない。あらゆる場合に、一つひとつ的事物に入つてその唯一無二性を具体化した 生 のは、すみは、それが成し遂げた完成物の中で休らうようになる。そのようなあらゆる完成物は、この観点から言えば、最終状態を表わしている。それは、画家によつて画架上に仕上げられた絵に相当する。が、もし子細に見てみると、創造としての生 が たとえいかに完全に創造したとしても 欠いているもの、また、そのような創造的完成物がいくつあつてもけつして満たすことができない欠落を見出すのは、まさにここなのである。もし完成を成し遂げた 生 が十分な形而上の自己実現と自己解放を遂げたいなら、被造物の完成に追加されなければならない何か他のものがあることに気づくであろう。実は、まさに完璧に創造するという行為において、完成の証しである純粹さと自由同様に不可欠の何かが失われてしまったのだ。

## 流動性の喪失

その「何か」とは、その流動性である。純粹性と自由は残るのだが、しかし創造のはゞみが停止してしまったのだ。そのため、創造としての生モーピリティとして事物の中に入つたものが、その後は「創造者」としてではなく、純粹「存在」としてその中に留まる。それに起つたことは、彫刻家が自分の創造的觀念を完全に表現することに成功した時、彼の創造衝動に起ることである。すなわち、それ以後は彼の衝動は創造的でなくなり、彫像に内在する「生命」または「存在」になるのである。

すべての自然物の完成は、それゆえ、生にとつて二つの相反するものを意味しているものと見なされなければならない。創造的行為の完結した実現として、それは、それを作り上げた生に創造的自由を与えるものと見なされなければならない。同時に、それはその生の運動をさえぎるものと見なされなければならない。生の絶対性に属する他のあらゆるもののはそのまま残つている。が、創造としての生は、まさに完全な自己客觀化を遂げることによつて、その生きいきした運動の点でそれ自体ではなくなり、まさにその精髄たる前進的はゞみをなすのである。

## 運動回復への切望

「」のように見られたものとしての客観的顯現の世界、あるいは自然界は、生の解放であり、かつ拘束でもあり、その肯定であり、かつ否定もある。それを見出された創造的プロセスに関しては、それは解放である。完成が遂げられた後に存在し続いている完結した事物の集合体としては、それは拘束である。これらを作り上げる上で活動的で創造的であった生は、今や、純粹「存在」として、それらの各自の中にいわば監禁されたからである。そうであるがゆえに、事物への単純な自己顯現の行為が、生に究極的満足を与えることはできないということが明らかになる。それどころか、そのように顯現したあらゆるものの中に拘束されている生の側には、あの失われたはずみ、生のまさに精髓であるあの創造的前進運動を回復しようとする深い形而上の「切望」が働いている。十分な自己実現は、それが再び創造的で活動的になつた時にのみ、成し遂げうるのである。

## 創造的はずみの回復

これがあの失われた要素、「リアリティ、自然、人間」の有機的総合を実現するにあたつて、第二項（自然）での完結の後に第三項（人間）へと向かう本能的傾向である。ちょうどみずからを自然の中での自己顯現へと向かわせたことが、創造として思い描かれた生に固有の内的

必然であつたように、生をこのさらなる探求へと駆り立てることが、創造としての生のさらなる内的必然なのである。どういうわけか、完成したものとしての事物が拘束してしまった創造的飛躍を、生はみずから回復しなければならないのだ。そして、そうしなければならぬだけでなく、それはまた、絶対に創造的な生に属するあの限りないすべての豊かさと自由の中でそれを回復しなければならない。要するに、純粹な創造性が再確立されねばならないのである。なぜなら、その時にのみ、純粹「存在」として事物の世界に監禁されている生は、再び創造としての生になるからである。

### 客体を通じての回復

そして、われわれのテーマの困難な部分に出くわすのはこゝである。というのは、「いかにして生がこれを遂げるべきなのか?」とわれわれが問う時、そのはずみは、まさに今それを妨げているものの力によつてのみ回復されつゝ、というのがその答えでなければならないからだ。失われた飛躍を、顯現を犠牲にして再発出させるようにすることはできない。客体の中に拘束された生が解放を見出すことを可能にするため、客体を廃止することはできない。また、生は、自然から撤退して、新規時き直しで創造し始めるという単純なやり方によつて、その形而上的情はすみを回復することもできない。一つには、まさに創造としての生に属している「前進性」を否定することになるであろうから。一つには、たとえそれが新規時き直しで

創造するとしても、それは結局はみずから創造物の中に監禁されることによって終わり、したがつて以前と何も変わらないであろうから。

ただ一つのやり方だけがある。そしてそれは前進することだ。生はなんとかしてそれ自体の顕現の世界へと前進し、その中に出現することによって解放を見出す。そしてそれが再びみずからを始動させ、それによってみずからを「存在」から「活動」へと脱出させるためにしなければならないことは、客体から退却することではなく、客体の側へとさらに突き進むことである。明らかなことだが、これは 生の運動を単に拘束するだけでなく、それが通過するのを許すような客体。言い換えれば、創造的な生の終点ではなく、焦点となるような客体 を創造することに成功した時にのみ、現実のものとなる。その時、およびその時にのみ、それは自由に使える道具を鍛造し終えるであろう。そのような焦点としての客体を通してのみ、生はみずからの創造物の世界内での監禁状態からみずからを抜け出させ、創造的になることができるであろう。

### 主体・客体としての人間

手短に言えば、そのような客体を 生 は人間の中に見出す。自然を通じての 創造としての 生 の有機的展開において、人間は第三項として現われる。なぜなら、この形而上の欲求が満たされるのは、彼の中で、また彼を通じてだからである。純粹「存在」が再び創造性の中に解き放

たれるのが人間を通じてであるのは、彼が自然の中の他のいかなるものもこれまで成功しなかつた存在だから すなわち、客体であると同時に主体だから だという、単純な理由のためである。対称的な二面を有する彼は、客体として自然を振り返って見、そして主体として自然から目を転ずる。そして客体としての彼の中に入った 生 を「存在」からいわば引き出して、「活動」に移し、それを向こう側で創造的に表現することができるのは、彼の主体性によつてである。そして彼が主体であると同時に客体であると言つことは、単に、彼の中で初めて 自然の中の生 は 白 意 識 へと開花すると言つことである。「リアリティ、自然、人間」の連鎖の中の「人間」は、そこでリアリティが 自 覚 へと目覚め、再び 創造としての生 になるべく放免される、そういうポイントを表わしているのだ。

### 連鎖の有機的性質

これが、「リアリティ、自然、人間」の連鎖に沿つた 世界過程 の段階的展開の中での人間の意義である。そして今、なぜこの過程が「有機的」 として述べられたかを見る事ができる。それが「有機的」なのは、各々の段階が他の二つに不可分に結びついているからであり、また、その全部が深い内的必然によつて展開していくからである。生 は、創造 であるがゆえに、みずからを 顕現 の中で表現することは自然であり、必然であつた。そして、まさにそれ自体の顕現した客体の世界の完成の中にいわば監禁されてしまった 生 が、「創造的活動」として

のその本質であるあの流動性を回復するために、それらの客体を貫通することによって救いを求めるることは、等しく自然で、必然であつた。生が生であるためには、このすべてが起らなければならなかつたのである。かくして、不可分の連鎖が続く中で、各々の項は次のそれを予想し、先行したすべての項をみずからの中に寄せ集めていく。

それゆえわれわれは、ちょうどすでに考察してきた一項（リアリティと自然）が必然であり、自然であつたように、世界過程が次の段階へと展開していくのについていき、創造としての生の永遠の物語がいかにして完結し、有終の美を飾るかを見ていかなければならない。われわれは、総合の第三項としての人間に到達した。今度は、クリシュナムルティの教えの中で、何が偉大な展開の中で人間が果たすべき役割か、また、どのようにして以前去ってしまったすべてが彼の中で寄せ集められ、極点に達せられるかを見てみなければならない。そこで、これができるだけ明らかにするため、最後の数節の主題にやや長く思いを凝らし、われわれが言つてきたすべてに照らして、「人間とは何か？」やや詳しく述べてみよう。

人間とは何か？

彼は、まず第一に、彼の究極的なスピリチュアルな唯一無二性（独自性）において、すでに討論したあの「自由」で「単純」な世界の中の一つの客体である。個々のあらゆる人間存在は、別個の完成体として、他の無数のそのような完成体と並んで、または客観的自然を構

成する他の無数の完成体と並んで、自然体として、形而上有に創造としての生のために存在する。そして彼は一個の完成体であるがゆえに、また一個の絶対物である。まったく独特な存在であり、またこの独自性によつて、他のいかなる完成体との関係または比較からも超絶した存在である。そのようなあらゆる生きた個体には、単にそれが完全であるがゆえに、創造的な生の全部が入り込んだにちがいないということを見るためには、そういったすべての創造的完成体について言つて言つたことを思い出しさえすればいい。それゆえ、あらゆる人間は、自然の中の一個の客体として、彼の独自性のおかげで完全であり、そしてそれと同じ理由のために、生の全体の表現である。そしてこの生は、人間が客体であるかぎり、彼の中に監禁されており、彼の「存在」として彼の内側に留まる。純然たる客体としての人間の本性の根底には、普遍的であると同時に独特の「存在」がある。そしてこの「存在」を、われわれは彼の「恒久資本」、「人間」としての彼に属しているのだが、しかし彼が単に客体であるかぎり、地下金庫室に隠され、寝かされたままの無尽蔵の基本的富と見なすことができるであろう。

が、人間は、客体であると同時に主体でもある。そして主体であるがゆえに、彼は創造的になることができるのだ。これは、彼が「存在」あるいは潜在物の中から自分の隠れた富を引き出して、それらを再び循環させる力を發揮することを意味している。そしてこれこそはまさに、われわれの公式（リアリティ、自然、人間）によつて彼がすることになつてゐることである。なぜなら、創造的であることは、彼の最も内奥の「存在」を「活動」へと移し変えることに他ならないからだ。創造のあらゆる行為は、かくして、遊休資産を現金に換えること、つまり、すでに入間

のものである何かを創造的エネルギーに変換することである。かくしてわれわれは、次の一般化に至る。人間は、形而上の存在として、何かになる必要はない。なぜなら、彼はすでに絶対的本質であるから。彼は単に、自分のありのままを表現し、それを解放し、そしてそれを現行貨幣に変換しさえすればいいのだ。そしてその目的は、彼が自分の「存在」の全部を、等式の対辯へと移した時 言い換えれば、彼の内なる 生 がそつくり 創造 として解放される時 絶対的「存在」が絶対的「活動」に変わった時に遂げられるであろう。その時彼は、最も十分かつ純粹な意味で、生 と一つになるであろう。創造としての生 は、人間を通じて、その元々の純粹さにおいて、しかも今や自己を意識しているという追加的栄光とともに、自己実現を遂げるであろう。このすべてが起こるためには、人間は、 生 それ自体が自然の中で最初に自己顕現する時に示す自由、完全性および易々たる自発性でもって創造することをおぼえなければならぬ。

かくして、絶対的な 創造としての生 になることがあらゆる人間の目的である。そして彼が生 の過程<sup>プロセス</sup>の輪を完結させ、それを元々始まつたところまで導くのは、それ（絶対的な 創造としての生 ）になることによってである。それゆえ今度は、この文脈において「創造」によつて何が意味されているのか、われわれは自問してみなければならない。人間が「創造している」と言う時、この言葉によつて何をわれわれは意味しているのだろう？

## 人間の創造性

人間の創造性は、自然の中で働いている 生 のそれと同じではない。人間のそれは反対方向に動くという、単純な理由のためである[原注 方向の変化は、実は円の中に見出すそれである。一つの円の下向きの弧と上向きの弧は、ある観点からは反対方向に向いているが、しかし後者は、前者によって立てられた曲線の連続にすぎない]。最初の創造は、一つの 生 が顕現した宇宙のすべての無限の多様性の中にみずからを現わすやり方でのそれだった。そしてその運動は、それゆえ、生 から始まって客体（物）で終わるものとして述べることができるだろう。なぜなら、客体は、その運動が成し遂げるべく企てたものの完結した実現を表わしているからである。が、今や変化が起こつた 客体が創造的主体になったのだ。ある創造的過程の終点であったものが、他の創造的過程の出発点になる。生 から発せられてその目的と実現を見出す。どこに？ 明らかに、生 の中に。

## 意義の創造

以前の創造性が 生 において始まつたように、新たな創造性は 生 において終わる。それは、客体（物）ではなく、生 それ自体を創造しなければならないのだ。では、いかにしてそ

れば 生 を創造することができるのだろう? 「よく単純なやり方で つまり、それを再発見することによって。言い換えれば、その課題は、総体として人間の環境を構成し、 むろん、彼自身のような他のすべての人間を含む、 広大な客体(物)の複合体を創造的に扱い、また、そうすることによって、それらをその一見した客觀性と外在性から、真にあるがままのものとしてのそれら すなわち、 生 それ自体の表現 へと再創造することである。別の言い方をすれば、これは、それら(広大な客体(物)の複合体)をそれら自身の元々の根本的リアリティの用語へと翻訳しなおさなければならない それが何を意味しているかを発見しなければならない ということである。人間のずっと向こう側にある 生 が、「意義」に関して取り戻されねばならないのだ。元々の創造の単純な行為によって客体の中に入り、それを独自の完成物、自然物にしたすべてのものが、今やその意味を解明する過程によって再発見され、その 源 に帰されなければならないのである。

### 創造的解釈

かくして「創造」は、人間の中での新たな冒險に乗り出す時、より正確には「創造的解釈」と呼びうるものになる。そのような創造は「自然の秩序」を妨害することも、それに追加することもない。それは単に、徹底的に「自然の秩序」を意義で燃え立たせることによって、 すでに潜在的にそこに含まれている価値と意味を創造的にそれに帯びさせることによって、 それを

変容させることである。もしわれわれが一人の画家　ある神聖なオートマティズム（無意識的自動作用）により、自分が何をしたかを知ることなくいくつかの傑作を創造し、それから自分自身の仕事の最中に目覚め、徐々にそれらの作品の驚異と美を知覚するようになり、自分自身の天才の奇蹟に気づいて驚喜する　そういう画家を想像することができまするなら、生　が人間の中の自意識へと目覚める時にそれに何が起るかについての感じをつかめるであろう。われわれが単純な顯現の世界として言及してきた、あの個別の完成物あるいは唯一無二性（独自性）から成る宇宙を具体化するという、元々の創造においては、生　は完璧に創造したのだ。なぜなら、生　であるがゆえに、それはそれ以外のやり方では創造できなかつたからである。が、芸術的手腕は無意識であつた。それは、木が葉を出すように自然で自発的だったのである。したがつて、そこには美と完成はあつたが、それらは意義を欠いていた。なぜなら、それらを讃える意識的精神性がなかつたからである。しかしながら、それらすべての完成物の豊かさの真価を正しく認め、理解することができる知性が出現するやいなや、客体（物）の全宇宙は変貌する。その時には、いわば顯現界は内側から照らされる。あらゆるものは客観的にこれまでどおりだが、しかし同時にあらゆるものはきわめて重大な変化を遂げる。なぜなら、価値と意義が生まれたからだ。その時、生　にとつて創造の眞の恍惚が始まるのだが、それはみずからを創造的に再発見したことの祝福でもある。

## 逆転した創造

主体でもある客体をようやく作り出した 生 が放免されるのは、そのような逆転した創造の中にあり、「与えられた主体」という焦点を通して、それはさらなる創造の旅に乗り出す。顕現の織物のあらゆる糸をほぐし、各々を金色の「意義の撚り糸」に変える、そういう創造の旅に。本の著者がその読者になる。歌の作り手がその歌い手になる。自然は単に客体（物）から成る世界ではなくなり、無限の意味の宝庫として開示される。<sup>ワールド・プロジェクト</sup>そしてこの意味を看破することによって、生 はおのれ自身を知るに至る。もしわれわれが 世界過程 の中での人間の場所と役割を定義する公式を求めるトすれば、それはおおよそ次のようになるであろう。「リアリティ、自然、人間」の有機的総合の中での「人間」は、創造としての生 が自意識へと目覚め、それ自身の仕事の創造的解釈によってそれ自体の実現に至るために使う、生きた道具である。

### 創造の焦点としてのあらゆる個人

そして、ここでわれわれが言う「人間」とは、抽象的な人間でも、総体としての人類でもなく、あらゆる具体的な個々人である。なぜなら、創造的な解釈という 生 の仕事は、あらゆる個人を通じて起こり、結局はあらゆる個人の中でみずからを実現しなければならないからである。各々が、あの偉大な自己発見のプロセスのための焦点としての役を果たさねばならないのだ。

そして目的は、人間の自意識を介して、生きた創造の原理が、元々の自由な状態でそうだつたように、絶対的な完成の容易さで働き出す時に、広大な顯現の全宇宙の中で、その創造の原理がその究極の意義、すなわち真理の用語へと即座にかつて確に解釈することができないいかなるものも残らない時に、達せられるであらう。この最高の境地において、個人は「生」と一つになるであろう。なぜなら、彼の存在の全部が純粹な創造的活動に変質したからである。そしてこれが起る時、われわれの総合の三項（リアリティ、自然、人間）は別々ではなくなり、一つに結集し、融合する。なぜなら「生」は、自然を解釈することによって彼女を取り戻すからである。二者は一体になり、有機的な自己同一性（主体と客体の一一致）に移る。そしてまさにそれと同じプロセスによつて解釈を繰り広げてきた「私」は、とうとう自分が「生」の「私」に他ならぬことを知る。偉大な宇宙の物語の最後に、自分自身を「創造的な生」として実現し、自然を生きた有機体としてみずからの中に包み込んだ人間がいる。各々の「私」は、その最高の照明の中で自分自身の中に他のすべての個人を包含するのだ。

### あらゆる解釈の独自性

しかし、この自己実現のプロセスは万人にとつて同一なのだろうか？ あらゆる人間は残りの

全員の経験を単に繰り返すだけなのだろうか？ 否。なぜなら、あらゆる個人は彼の本質において唯一無二（独特）なので、彼を道具としてなされる解釈は、その独自性の特質を帯びる。人間を通じての 生 自身のそのようなあらゆる再発見は、生 にとって新鮮な冒険である。本は何度も何度も読まれるが、その都度読み手によって新たに読み直される。純粹存在 として発出した 生 は、生きている人間の数だけ多種多様な個性的表現で、「意義」として元に戻つてくる。

### 限りない創造

そして、確かにそうでなければならなかつたのだ。と言うのは、そのような果てしない自己増殖の能力は、少し考えてみればわかることなのだが、創造としての生 という全観念の中に最初から潜在していたからである。生 は創造であり、また無限なので、ぜひとも無限に創造し続けねばならない。それはみずからを増殖させ続けながら、ひたすら前進し続けていかねばならないのだ。そしてこのプロセスには、形而上的に言えば、終りはありえない。かくして、単純な顕現の宇宙を構成するあの無数の独自性を具体化した時、それはそこで休止することはできない。これらの名々は順次中心にならなければならないのであって、そこから創造の全プロセスが新たに始まることを可能にする。その上、そのような新鮮な創造が単に数値的な追加であるだけでは十分ではない。それは、種類においてまったく新しくなければならないのだ。このようにして、

増殖は量的であるだけではなく、また質的でもあり、それは永久に続かなければならない。單純な顕現それ自体はけつしてやまないという事実によつて可能になる永久性。客体（物）の創造は常に補充・更新され、そしてこれらの名々がすべて、遅かれ早かれ主体になるポイントまで駆り立てられなければならない。なぜなら、この駆動力は 生 それ自体に固有のものだからである。したがつて新しい焦点が次々と現われ続け、その名々が その独自性の純粹さにおいて生 に新鮮な自己表出を与える。要するに、われわれは 生 の神祕に直面しているのだ

永久に同じであり続けながら、果てしなく自己増殖し続けるという。

最後の数節はわれわれをやや高次で抽象的な領域へと踏み込ませた。が、原理自体は明らかだと私には思われる。自分のまわりの宇宙をその生きた「意義」の用語によつて解釈し直し、ついには 生 が元々持つている意味の純粹さと豊かさにおいてそれを理解し、感じるようになること と それがあらゆる人間の役割である。そして彼がそうすることができる時、彼は 生 と一つになるであろう。なぜなら、顕現した客体のあの全世界への単純な関係が 生 が客体の世界を創造した時には無意識だったのに対して、十分な意識をもつて 彼自身の内側に確立されるであろうから。生 の「目」は人間の視角を通じてビジョンへと目覚め、生 の「心臓」は人間の心臓でもつて鼓動することを覚えるであろう。

そしてこれは、あらゆる人間が自力でしなければならないことである。なぜなら、独自であるがゆえに、彼は他の誰にも助けを求めるることはできないのだ。彼は、生 がその普遍性を彼に授けるのに応えて、彼の独自性を 生 に提供しなければならない。彼は、徹底的にかつ断固と

して彼自身になつた時初めて、眞に解釈し始めることができるのだ。

### 究極の動詞

かくして、われわれの 創造としての生 の公式に照らして、人間の高次の、またはスピリチュアルな生におけるあらゆるものは、創造的に 再創造または解釈によつて 表現されねばならない、ということがわかる。スピリチュアルな生における究極の動詞は、「作る」または「創造する」ことであつて、受動的な意味で「ある」ことではない。人間は、その日常生活において、習慣的に行使することができる創造的解釈能力を持つてゐる。彼の世界は、任意のどの瞬間にも、彼がそれに読み込むことができた意義の度合いと性質である。それゆえ、彼の再創造性の完成に、彼自身と彼の世界の両方の完成があるのだ。そしてこれらの両者が完成に至るのは、易々たる、自發的な確かさで、刻々に彼に経験することを迫つてくる顯現の全宇宙を、その究極の美と真理の限りない深さと豊かさへと 翻訳して戻すことができる時である。

そのような創造的理諭と感情の完成の中に、スピリチュアルな存在としての人間の最終的自己実現がある。が、最終的ではあるけれども、それは実は最後ではない。それはむしろ始まりなのである。なぜなら、彼が純粹な解釈の生きた原理になつた時に初めて、彼は自分の十分な形而上の「人間性」を実現し、「リアリティ、自然、人間」の有機的総合の中での眞の生活に入るからである。クリシュナムルティの教えにおいては、人間は、 生 と一つになるやいなや、形而上

的「人間」になるのだ。